

夙川学院短大 ○橋 喬子 東京家政学院短大 高野美栄 田原靖子

京都短大 田岡洋子 滋賀女短大 成田巳代子

目的 高齢化社会、核家族化は高齢者の自己意識にも影響を与え、大きな変化がみられる。そこで、生活の中の被服について、特に固定観念でみられている老年期の色彩を高齢者はどのように考えているか。まず、被服の嗜好色、嫌悪色。地域環境による相違点を明らかにし、老年期における被服の嗜好色と色彩との関連を考察した。

方法 1) 対象 1535名 2) 調査時期 3) 手続 4) 色彩の観察 5～6 報と同様  
5) 地域別 1 群・245名（北海道，山形）、2 群・584名（埼玉，千葉，神奈川，山梨）、3 群・200名（東京）、4 群・506名（三重，滋賀，京都，大阪，奈良） 6) 調査場所 老人クラブ11、老人ホーム4、敬老館13、在宅ほか 7) 観察条件 北窓日光、晴天、照度 800Lx以上、試料と目の距離 30cm、垂直上方から観察 8) 調査内容 嗜好色 1 色、嫌悪色 1 色、着装したい色 1 色。

結果 被服の嗜好色は、男女ともは P B 系の暗い紫みの青、Y R 系の暗い灰黄赤、男は N 系の灰色、女は P B 系の群青色。P B 系、P 系に集中がみられる。男に N 系が多いのは従来よりの色彩意識によるものと思われる。被服の嗜好色と色彩の嗜好色をみると同じ P B 系でも被服はトーンが低い。嫌悪色は R 系あざやかな赤、N 系黒で被服と一致する。地域別は、1 群 B 系の灰青、2 群 P B 系の群青色、3 群 P B 系の暗い紫みの青、4 群 N 系の灰色で地方ほど無難な地味な色彩傾向にある。老年期の被服に求める色彩は、暗い色やあざやかな色のような刺激の強いものはさけ、やすらぎを感じる落ち着いた色であることが判明した。